

## 2021 年度合同講演会

日 時：2021 年 5 月 22 日（土）14:00～16:45

開催場所：オンライン

主 催：日本生態学会・日本動物学会・植物学会 各沖縄支部会

### プログラム

(座長：守田昌哉)

14:00-14:05 開会挨拶

立田晴記（琉球大学・農学部）

14:05-14:35 S1（日本生態学会）

日本産樹木種の種子特性の地理的分布パターンと環境要因との関係について

藤 彰矩（琉球大学・理工学研究科）

14:35-15:05 S2（日本動物学会）

福島原発事故後の放射能汚染環境下におけるカタバミ（*Oxalis corniculata*）の含有成分  
の変化とその食植性昆虫への影響

阪内 香（琉球大学・理工学研究科）

15:05-15:35 S3（日本植物学会）

マタタビ属の性表現

山口陽子（琉球大学・理工学研究科）

15:35-15:50 休憩

15:50-16:10 S4（日本生態学会）

沖縄県の沿岸域における海洋生物の多様性パターンと保全優先地域

塩野貴之（琉球大学・理学部）

16:10-16:40 S（日本動物学会）

白化したウスエダミドリイシは、いつ産卵しないと決めたのか？

武方宏樹（琉球大学・戦略的研究プロジェクトセンター）

16:40-16:45 閉会挨拶

竹村明洋（琉球大学・理学部）

## 要 旨

### S1 日本産樹木種の種子特性の地理的分布パターンと環境要因との関係について

藤 彰矩(琉球大学・理工学研究科)

陸上生物において気候勾配が生物の分布に影響を及ぼすことが広く知られている。本研究では、日本産樹木種を対象に生活史初期の種子特性の出現パターンを明らかにし、種の地理分布に影響を及ぼす環境要因を検証した。

### S2 福島原発事故後の放射能汚染環境下におけるカタバミ (*Oxalis corniculata*) の含有成分の変化とその食植性昆虫への影響

阪内 香(琉球大学・理工学研究科)

今年は福島原発事故からちょうど10年の節目の年となるが、この間、放射能汚染環境における野外生物への調査報告が続いている。しかし、これまで国際機関等によって提示されてきた理解は、室内照射実験による線量評価を基礎としており、フクシマ以後に野外調査から得られた知見とは必ずしも一致しない。本発表では、野外において被曝により含有成分量を変化させた植物(カタバミ)が、単食性である食植性昆虫(ヤマトシジミ)に与える影響を検討する。被曝線量だけによる評価に加え、野外条件を考慮するこのような試みは、フクシマ以降に始まり、放射線生物学は現在過渡期を迎えている。その一端をこの機会に紹介したい。

### S3 マタタビ属の性表現

山口陽子(琉球大学・理工学研究科)

日本に4種が自生するマタタビ属は、機能的雌雄異株である。マタタビでは、両性花が作る不稔の花粉が、マルハナバチを主とする送粉者への報酬として機能していることがわかった。現在、沖縄のシマサルナシについて調査を始めたところである。

### S4 沖縄県の沿岸域における海洋生物の多様性パターンと保全優先地域

塩野貴之(琉球大学・理学部)

沖縄県の沿岸域における、海洋哺乳類・海洋爬虫類・沿岸魚類・海産貝類・海産甲殻類・イシサンゴ目・海藻類の分布を、1kmグリッドスケールで可視化し、種多様性パターンと保全優先地域を解析した。その結果、面積が大きい島の藻場や河口付近で多様性が高く、保全優先度も高いことが明らかとなった。

### S5 白化したウスエダミドリイシは、いつ産卵しないと決めたのか？

武方宏樹(琉球大学・戦略的研究プロジェクトセンター)

瀬底島周辺に生息するウスエダミドリイシ *Acropora tenuis* を対象に、産卵前後のトランスクリプトーム解析を行った。対象とした3群体の組織切片を観察したところ、前年に白化が確認された1群体が産卵しなかったことが示された。RNA-Seqの結果から、少なくとも産卵の一か月前には非産卵を決定していたのではないかと推定された。